



愛隣幼稚園.....

# 園だより

.....19.4月

## まずは「いいね！」

例年より早い桜の開花でした。ところがその後、気温の低い日が続き桜の見頃は長く続きました。

それで春休みの幼稚園には、卒業生やその親たちもやってきて桜の樹を眺め、大人はおしゃべりに夢中になったり、子どもたちは仲間と走り回ったり。たった1本の桜の樹ですが、おかげで私たちはとても幸せな時間を過ごすことができました。幼稚園が始まり、少し強く吹く風に桜の花びらが舞って、それは素敵な花吹雪。子どもたちの記憶にこの風景は残るのだろうか、今年もまた思う春です。

愛隣の2019年度が始まりました。3月の修了礼拝で新しいバッチをもらってから、まだ3週間くらいですが、幼稚園が始まった途端、子どもたちはほんとにひとつ大きい組の人たちになってしまいました。(笑、という文字が入りますが・・・)それは特につばさ組の子どもたちに顕著です。

T(先生)「新しいたんぼ組さんが入ってくるからよろしくね。」

C(子ども)「そうだな。すぐ泣いちゃうからな。」

T(心の声)「いやいや、さっき君がベソかいてたから(笑)」・・・とか、

最近までペンギん組が上り下りしていた階段を、今日はつばさ組の子どもたちが上り下り。たったそれだけのことで、それがなんだか自信満々であったり・・・とか。

本質はやっぱりつい先日までばら組だった君たちなのですが、どこから溢れてくるのか、根拠のない自信のお陰で子どもたちはすっかり大きくなってしまったかのようです。もちろん、このまま何事もなくすっかり年長組になど、なるわけではないのですが、新しいバッチを付けただけでも子どもたちはこんなに張り切ることができる。そんな子どもらしい姿を私たちは肯定的に受け止めています。しかし、子どもらしい姿はこんな姿ばかりではありません。それは入園式の翌日、登園直後から始まります。

「やだ～～、かえる～～」「おかあさんがいい～～」「ようちえんはきらいだぁ～～」

絶叫して、涙が止まらなくて、力いっぱい抵抗して不安や心細さを表現します。子どもらしい姿です。でも、きっとそれは朝、家を出るときにも行われるかもしれません。毎日、毎日繰り返されれば、親も泣きたくなります。楽しそうに登園している親子を見れば、「どうしてうちの子は、あの子みたいにならないんだろう。」と思うのは当然です。本当はこれも立派に子どもらしい姿なのですが、これは肯定的には受け止められない。子どもらしい姿、その子らしい姿を私たちはたくさん見るのですが、それを肯定できるかどうかは、結局、私たちの都合に左右されているのです。“こんな子になってほしい”と願うことが悪いものではありません。愛隣幼稚園も目標とする子ども像をもっています。でも、その前にまずはひとり一人の子どもの、ありのままの姿を肯定的に受け止めてみたいと思います。私の大好きな写真家・小西貴士氏がこんなふうに言っています。

### 『子どもは子どもを生きています』

そう！子どもは大人の都合の中で生きていなくても、大人の希望を叶えるために生きていなくてもいい。

子どもは実に当たり前、大真面目に、子どもとして子どもを生きていなくて、それを大人はまず肯定したいと、私は考えています。いいですか、彼らは実に当たり前、大真面目に生きています。そのことはやはり「いいね！」って言ってあげたいじゃないですか。笑っている顔も、怒っている顔も、泣き顔も、泥んこの顔も、不安な顔も、ふざけた顔も、大人の都合には合わないこといっぱいあるけれど、「いま、キミはそんな気持ちなんだね。そうか。そんなキミもいいね。」と大真面目な子どもたちを肯定しましょう。(注意をひとつだけ・・・ホントに危ないこと、駄目なことは肯定しませんよ。)  
「いいね！」って言ってもらえると、それは根拠のない自信になって子どもたちを大きく成長させる力になっていきますから。